

『ミュージック・マガジン』フィードバック欄に掲載されなかった2通の投書をめぐって

加藤 彰

「太陽肛門スパパーン 今年のカジロックに出演し、初のベスト盤をリリースした、白いブリーフ姿でパフォーマンスする大所帯の芸術集団」というタイトル（としてはしかし単なる説明に過ぎず失格レベルだろう）の記事を掲載した『ミュージック・マガジン』という、その名のと通りの音楽雑誌がある。いま現在、この雑誌の発行部数と返品率がどういった数字であるのか、そしてそれらとは独立したものとして見なされることのありうる、音楽業界における同誌の位置づけがどういったところにあるのか、さらには広く一般のリスナーに対するその影響力がどの程度のものであるのかについて、詳しい事情は知らない。ただ、この2018年4月号で創刊49周年を迎えた、それだけの歴史を持つ雑誌であることから、これに裏打ちされた自負のようなものが編集部にあるらしいことは、例えば同誌のウェブサイトに記された、「自社製品のPR」であるかのような以下の文言からもうかがうことができるのではないかと思う。

アルバム・レビュー／ビデオ・レビュー……洋楽・邦楽の最新リリース 200～300 タイトルを鋭い評文とともに10点満点で採点。音楽ライフの頼れる味方！

さて、我らが太陽肛門スパパーンの最新作である『太陽肛門スパパーンと人間』もまた、このアルバム・レビューのコーナーにおいて「鋭い評文とともに10点満点で採点」されたのだった。その評文と採点が掲載されたのは17年10月20日発売の11月号同欄。一方、上記の記事が掲載されたのは11月20日発売の12月号だった。

ここで、その記事自体には（まあ、当然のことながら）書かれていない、掲載に至るまでの経緯をかいつまんで説明すると、97年3月まで同誌編集部にて在籍していた私（加藤）が、懇意にしていたというほどではないものの、その時点でひと回り年下の後輩社員という関係であった現編集部員の一人（バック・ナンバーによると98年11月号から同誌の編集に携わっていることが確認された）を花咲政之輔に紹介し、そして17年9月20日に面会の約束をとりつけた花咲に私も同行して、神田神保町にある編集部からほど近くの喫茶店でおよそ2時間、この編集部員に対していわゆる売り込みをかけたということがあり、結果、花咲へのインタビューを中心とした記事が企画されるに至ったという次第になる（なお、ここで、日程的には10月20日発売の11月号にもけっして記事の掲載が間に合わないほどではなかったことを付記しておこう）。

で、11月号に掲載された『太陽肛門スパパーンと人間』についての、その評文と採点である。小山守というライターによる、ごく短いその文章をすべて引いてみよう。

20年以上続いている大所帯バンドの初期ベスト盤。プログレ、昭和歌謡、パンク、ソウル、ブルースなど雑多な音楽性を詰め込んだ予測不能サウンドが持ち味。歌は下ネタ混じりでトホホな感じだが、演奏の難易度は相当に高くメンバーの凄腕が圧巻。⑥

なるほど、これは一見すると「鋭い評文とともに10点満点で採点」されたものであるかのように見える。点数こそ6点（というのはこのライターが11月号で取り上げた20作品の中では最低のもの。他に2作品が6点だった）に過ぎないけれども、「演奏の難易度は相当に高くメンバーの凄腕が圧巻」という肯定的な文言によって締めくくることが、評価すべき点についても抜かりなく押さえているという印象をもたらす格好になっているとは言えるからだ。しかし、そうであればなおのこと、減点の根拠を示す記述以外ではない、「歌は下ネタ混じりでトホホな感じ」という一節が、看過することの出来ない点として浮かび上がってくるとも言える。すなわち、その一節こそ、このライターが、実は（と、あえて言うておこう）CDとDVDの2枚組である『太陽肛門スパパーンと人間』の、DVDに収録された短編映画『世界に一つだけの花』をまったく観ていないことを示すものであり、だからこの「評文」ではDVDのこと、すなわち映画とその劇中の歌と音楽のことには一言も触れられていないのであって、したがってそれはレビューとしては重大な欠陥が疑われるものである、とすることができるからである。

先に記したように、かつて私は『ミュージック・マガジン』編集部（86年4月から11年間）在籍していた。だからというわけではないが、69年の『ニューミュージック・マガジン』創刊時には「今月のレコード」というコーナーにおいて100点満点制として始まり、『ミュージック・マガジン』に誌名を変えた80年以降、現在に至るまでアルバム・レビューとビデオ・レビュー、またクロス・レビューにおいて10点満点制として存続している「採点」に対して、「アレルギー」——というものが存在していたことは田中勝則著『中村とうよう 音楽評論家の時代』（2017年）といった本にも書かれているけれども、私の場合、特にそうした拒絶反応が起きることはなかった。ただ、その代わりにといては何だが、むしろそれらの点数から、評文を記した書き手の、作品に対する理解の度合をうかがうというある種の裏目読み（とその楽しみ）を覚えるようになったところはある、すると例えばこの『太陽肛門スパパーンと人間』に対して6点がつけられたことは、同作品に対するその評者の理解の度合は6割程度であったという解釈を導くものにもなるわけである。

だが、果たして本当のところはどうか——ということ、この小山守というライターに問うてみたいと思った私は、(その時点ではあくまでも太陽肛門スパパーンについての記事が掲載される予定の段階であった)『ミュージック・マガジン』17年12月号のフィードバック欄に投書することを思い立ち、10月29日に以下の文章を同欄のアドレスへ送信した。

■「トホホ」の真意を問う

11月号アルバム・レビュー／ロック・日本における『太陽肛門スパパーンと人間』の評文には、看過することの出来ない記述があった。私はここでそうした記述が行われたことの問題点を考えるとともに、評者の小山守氏にはそうした記述を行ったことの真意を質してみたいと思う。

まず同作の評点は⑥である。これは⑩を満点とすると、その3分の2に満たないことから及第点をやや下回るものと解釈することが出来よう。そこで評文を見ると減点の理由を示す批判的な記述は、「歌は下ネタ混じりでトホホな感じ」という箇所であることが分かる。そして、看過出来ない記述とは、まさにこの一節なのである。

周知のようにとまでは言えないかもしれないが太陽肛門スパパーンは、政治的には左翼であることを表明し、そしてそうした視点からなる歌をうたい劇を演ずるバンドである。先に行われたフジロック・フェスでは「フジロックに政治を持ち込むためにやってきました！」と自ら名乗りを上げたこともネットを通じて確認することが出来る。ネットでいえば音楽サイトの「ナタリー」は『太陽肛門スパパーンと人間』が「CDとDVDからなる2枚組で」「DVDには反新自由主義・反資本主義の世界観を表現したSFミュージカル映画『世界に一つだけの花』が収められ」ていることを伝えている。が、しかし一方、小山氏の評文においては、そのような情報さえ一切記されていないのである。

一体、小山氏は、スパパーンにおけるそのような文脈を知らなかったのだろうか。あるいはそれを知っているなら、彼らの歌に性的なことに関する言葉がちりばめられているとしても、これを「下ネタ混じり」と捉え「トホホ」と感ずることは、聴く側の想像力がそれを許さないだろうと私は思う。とはいえ小山氏が、スパパーンは政治的なバンドであることを知ったうえで彼らの歌を「下ネタ混じりでトホホ」と感じたのであれば、そこには想像力の貧しさが認められるばかりではあるものの、そうした水準での解釈がありうることも認めなければならないと思う。だが、小山氏の評文からは、そのことさえも分からないのである。

もちろんアルバム・レビューのスペースが限られたものであることも分かる。だから例えばミュージック・マガジンのウェブサイト上で、小山氏に、もし先の評文に言い足りなかったことがあるとすればその追記を公開することを提案したいのだがどうだろう。私は『太陽肛門スパパーンと人間』のブックレットに解説文を寄せ、彼らが政治的

なバンドであることを記したつもりである。それだけに私は小山氏が「歌は下ネタ混じりでトホホな感じ」と書いたことの真意をまずは知りたいのである。

投書の末尾には署名が入り、それと見出しを含めて15字×76行。「分量は800字程度(中略)を目安にお願いします」との注意事項が同欄には記してあり、これを4割以上超過していることになるが、そのような注意事項の文言や正誤表、編集部からの「お詫びと訂正」などを差し引いても、当該のスペースに十分収まる分量ではある。また、この12月号には、予定どおりに進めば太陽肛門スパパーンについての記事が掲載されるから、加えてフィードバック欄にスパパーンのことを話題とした投書が掲載されたなら、それだけ情報量は多くなり、読者の関心を引く可能性も高まるはずである、という程度の下心があったことは明かしておこう。

だが、結局、12月号のフィードバック欄に投書は掲載されなかった。掲載の可否についていえば、それは編集部の専権事項であるから、下された決定そのものに異を唱えるつもりはない。ただ、この12月号が発売される直前、スパパーンの記事を担当した編集者(彼がフィードバック欄の担当でもあるかどうかは知らない)から花咲政之輔に、記事掲載誌を送付したことを知らせるメールが届けられ、それを花咲は私のところに転送してきたのだが、そこに型通りの挨拶が記されたあと、以下のような文言があったことを見過ごすわけにはいかなかった。

なお、加藤さんの投稿については、結論から言うと今回は掲載いたしませんでした。志田さんによる今回のインタビュー記事が、小山さんのレビューに対する批評になっていると判断いたしました。

二つめの文章は、そこに「判断」という語が記されていることから、加藤の「投稿」(というほどのものでそれはなく、だから私はここまで投書と記してきた)を掲載しないことにした、その根拠を述べているものと解釈してよいだろう。編集部は「志田さんによる今回のインタビュー記事が、小山さんのレビューに対する批評になっていると判断」したため、12月号のフィードバック欄に加藤の投書は掲載しないことにした、というわけであるのだろう。ここで、「志田さん」というのは花咲にインタビューをしてスパパーンの記事を書いた志田歩氏のこと、私は志田氏とは編集者とライターという関係として25年来の付き合いがある(ただ、志田氏がスパパーンの記事の書き手となったのはあくまでも編集部の人選による)。

そして、実を言うと、アルバム・レビューの評者である小山守氏とも私は、かつてライ

ターと編集者という関係の下で仕事をしたことがあった。私が『ロック画報』という雑誌の編集を引き受けることになった当初、小山氏に70年代の日本のロック・アルバムの再発CDについての評文を依頼したのだが、時代的な背景や文脈といったものを踏まえているかどうかはまったくもって疑わしい、単なる感想文レベルの文章を提出してきて、それは書き直しをさせても改まるところがほとんどなかったの、ボツにこそしなかったものの、彼に原稿を依頼するのはそのときを最後としたのである。2000年秋のことだからもう17年前になるわけだが、今回の小山氏による『太陽肛門スパパーンと人間』の評文を読んで私が感じたのは、良くも悪くも（の一言を添えておけば多少のフォローにはなるだろうか）氏の書くものはこの間まったく変わっていないということであった。

それはともかくとして、スパパーンの記事を担当した編集者によれば、志田歩氏が書いたその記事は、小山守氏が書いた『太陽肛門スパパーンと人間』のレビューに対する批評になっているとのことなのだが、果たして本当のところはどうなのか——まったくもってそれは疑わしいということだけをただちに思った私は、この編集者に直接メールを送ってみようと考えた。

まず、加藤の投書を掲載しなかったことの根拠に対する疑念の表明、すなわち、志田氏が書いた太陽肛門スパパーンの記事は、小山氏が書いた『太陽肛門スパパーンと人間』のレビューに対する批評といったものにはなり得ていないことを、双方の文章から比較対照される記述を引用しながら、またスパパーンのサイトに転載された阿部嘉昭・現北海道大学准教授による2本の論考「境界が溶けてゆく——太陽肛門スパパーン『馬と人間』について」（2005年）、「ザッパと偽史と盆栽 太陽肛門スパパーンについて」（2007年）などを参照しながら説明していき、続けて、それとはまた別の、志田氏の記事によってあらたに生じた問題点を指摘していったのち、さて、いまやこうした一連の事情を最もよく知ることになったその編集者こそが、実に『ミュージック・マガジン』誌上においては太陽肛門スパパーンのことを論じるのに誰よりもふさわしい存在となったはずであるから、例えば、近く行われる予定があるスパパーンのライブ（その時点では12月18日、タワーレコード池袋店での「太陽肛門スパパーン New Album『太陽肛門スパパーンと人間』発売記念スペシャルライブ&特典会」だった）を同誌の「Captured Live」というライブ・レビューの欄で取り上げ、書き手はこの編集者が自ら引き受ける方向で進めることを提案してみたい、そしてまた、加藤の投書「『トホホ』の真意を問う」のフィードバック欄への掲載についてもあらためて検討をしてもらいたい——といったことをしたためてみたところ、結構な文字数になってしまい、読み返しながら1万8000字程度にまとめた形のものを11月27日深夜、花咲宛でのCcを付けた形で送信した。

すると、12時間後の28日13時に、取り急ぎ、といったふうの返信がこの編集者から、花咲宛てのCcを付けた形で送られてきて、そこには相当みっともない弁解の文言もあるので直接の引用はしないけれども、ようは加藤からのメールを読むだけの時間的な余裕がなく少しの猶予をもらいたい、というもので、代わりにとっては何だが、花咲から私のところへさっそく送られてきたメールの一部を紹介しておく。

さて、先ほど「忙しい」ので長文のメールを読んでいる暇がない由返信が来ていましたが、編集者という職責を考えた場合、この程度の文章を読むのは大した時間ではないはずで、まあ今まで明らかになったような言い訳に過ぎないのは明白であり、「トホホ」な事態ですね…

いや、まったく……といったやり取りを私は花咲と行い、また『ミュージック・マガジン』フィードバック欄には掲載を希望する投書としてもう一度「『トホホ』の真意を問う」を送ったが、それは17年12月20日発売の18年1月号にも掲載されることはなかった（その代わりに、というわけでもないだろうが、この号に掲載された読者からの投書は見出しと署名を含めて15字×74行という分量のあるものだった）。

このとき私は、投書が掲載されなかった場合のことを考えて、「太陽肛門スパパーンミュージック・マガジンを勝手に販促します」と題した同誌への「応援」文に「『トホホ』の真意を問う」の全文公開を抱き合わせたフライヤーを作って花咲に渡しており、それは18日タワーレコード池袋店の「太陽肛門スパパーン New Album『太陽肛門スパパーンと人間』発売記念スペシャルライブ&特典会」で配布された（ちなみに同誌が都内のレコード店に配本されるのは毎月16日前後で、1月号もすでに置かれていた）。

が、その日の出来事では何よりも、タワーレコード側による過剰な検閲および介入（実にスパパーンはこのとき「白いブリーフ姿でパフォーマンスする」ことを断念しなければならなかった）に対して彼らが、ごく当然のように抗議と問題提起（したがってそのための——「表現の自由はかろうじて守られている」という言葉のある、細野晴臣がタワーレコードのキャンペーン「NO MUSIC, NO LIFE」に寄せたコメントの引用を含む——フライヤーもまた配布された）を行いながら、その政治的な演劇と演奏を貫徹したところこそを特筆しておくべきだろう。そして、いや、しかし、果たして本当に時間がなかったのかどうかは知らないが、『ミュージック・マガジン』の件の編集者が会場に顔を見せることはなく、また「Captured Live」欄への寄稿を依頼されたと思われる同誌の関係者の誰かがそこに来ているということもなかった。

17年12月25日に、私は三たび投書「『トホホ』の真意を問う」を、『ミュージック・マガジン』2月号フィードバック欄への掲載を希望するものとして送信した（細かい話になるが2度目の投書から「私は『太陽肛門スパパーンと人間』のブックレットに解説文を寄せ」という箇所を「私は『太陽肛門スパパーンと人間』のブックレットに解説文を寄せた者であり」に加筆している）。その際、送信メールの文面には、志田歩氏によるスパパーンの記事ではいくつか不備の疑われる点があること、また、それにもかかわらず1月号にはスパパーンの記事に関する「お詫びと訂正」が掲載されなかったこと、そしてそれらのことは、『ミュージック・マガジン』編集部が、日本のインディペンデントかつマイナーなミュージシャンを取り上げた記事については事実関係の確認さえ怠り、さらにそのことを指摘されてもこれを黙殺するという対処の仕方をして恥じるところがない組織であることを疑わせるもので、果たして、そうした編集部の有り様が白日の下にさらされたならば、もはや取り返しのつかない事態になるかもしれない、といった旨のことを記しておいた。が、18年1月20日発売の2月号フィードバック欄に投書「『トホホ』の真意を問う」が掲載されることはなく、また12月号掲載の太陽肛門スパパーンの記事において不備があったことの報告と、その「お詫びと訂正」がなされるということもなかった。

そして私は『ミュージック・マガジン』3月号フィードバック欄への掲載を希望するものとして投書「『トホホ』の真意を問う」を1月22日に送信し、同時に、スパパーンの記事を担当した編集者に対して、加藤からのメールを読むだけの時間的な余裕がなく少しの猶予をもらいたいという連絡を受け取って、ちょうど8週間経ったけれども、そのメールを読んだうえでの返信というものは、いまだ受け取っておらず、なお返信に時間を要するのであれば、それについての連絡だけでもあって然るべきではないかと思うが、そうしたものさえ無いのは一体どういうことなのか、と少々の詰問口調を交えた催促のメールを送りつけた。これは花咲宛でのCcを付けて送信したのだが、それもあってか花咲によるいっそう厳しい言葉からなる返信要請のメールが、スパパーンの記事担当編集者（と私）に対しては送られ、ここでようやく、その編集者から私と花咲に、まず返信が遅れたことを詫げるメールが届き、その3日後の1月26日に、加藤からの17年11月27日付け（であるから実に2カ月前）のメールを読んだうえでの返信というものが送られてきた。

それは、しかし、何とも驚き呆れるという以外にないシロモノだった。なぜなら、「加藤さんの投稿については、結論から言うと今回は掲載いたしませんでした。志田さんによる今回のインタビュー記事が、小山さんのレビューに対する批評になっていると判断いたしました」という前言を撤回することなく、にもかかわらず、その前言を翻すかのように、この編集者は小山守氏と氏による『太陽肛門スパパーンと人間』の評文を擁護するとしか見なすことができない文言を書き連ねていたからである。

ここで、その全文を晒すまでのことはしないけれども、正確を期するための引用はためらうことなく再構成を試みよう。スパパーンの記事担当編集者いわく、『ミュージック・マガジン』のアルバム・レビューを執筆するライターには「毎月相当数のアルバムの評文」が依頼されるなか、小山氏には「毎月 50 枚程度」が送付され、「その中から 20 枚程度」がレビューの対象となる。その際、「当然」（なのだそうだ）「それぞれのアーティストやアルバムに対する知識や理解、好みの濃淡はあり」「それを前提に」「いろいろな音楽を聴いてきた蓄積をもとにアルバムを聴いた印象で評価してもらおう、ということで」評文は依頼される。「その意味で、加藤さんにとっては理解が浅いと思われるのは」（またしても）「当然」（なのだそうだ）であるが、「小山さんは正直に聴いた印象をもとに評価を下しているのであって、それは編集部としては否定できない。「そのため、編集部で話し合い、掲載可否を判断する編集部の権限で、加藤さんの投稿は掲載しないことに決まったのだという。

そして、「もちろん批判があるのは当然」（と三たび言われると、この編集者は一体なにゆえにそれらのことを「当然」と思うのかが、それこそ当然のように疑問に思えてくる）であるから、小山氏には加藤から「このような投稿が来ているということは」伝えた。すると、小山氏からは「加藤さんのご意見はありがたく受け止めます。今後はより真摯に音楽と向き合っていければと思います」という返事があったのだという。

笑止！ という言葉をステージの上で鋭く言い放つ花咲政之輔の姿に私はこれまで何度か接したことがあるが、上に引いた太陽肛門スパパーンの記事担当編集者からのメールに目を通しながら私の脳裏に浮かんだのはそうした瞬間であった、といえは出来過ぎな話になるかもしれない。しかし、これにはやはり笑うしかないだろう。「理解が浅いと思われるのは当然」であり「批判があるのは当然」であることを編集部が認める、その程度の文章を掲載しているのが『ミュージック・マガジン』のアルバム・レビューである、というのなら、一体そうしたものを「音楽ライフの頼れる味方！」などと言うことが、どうして出来るのだろうか。いや、彼らがなお、そしらぬふりでこのような「自社製品の PR」をし続けたとして、少なくとも『太陽肛門スパパーンと人間』のレビューとこれを書いたレビューアーについて言えば、もはや読む側がそれに頼ることなど出来ようはずもないだろう。

編集者からのメールにはまだ続きがある。12月号のスパパーンの記事には不備が疑われる点があると私が指摘をしたことに応じて、掲載写真に「キャプションを入れなかった点、また DVD が付属されていることに対する言及がなかった件は、確かに読者に対して不親切」だったので、「遅ればせながら 3月号のフィードバック欄に、編集部として読者にお

詫びし、追加情報として説明」をする、としたまではよいのだが、このあと、「最後に、純粋な新譜ではない初期ベストのリリースというタイミングで、本来の弊誌の基準では、広告出稿でもない限り基本的に取り上げていないものを、編集部の先輩である加藤さんがプロモーションに来られたので、ほかの編集部員に頭を下げてページを確保し、インタビュー記事を実現させるよう努め」たにもかかわらず、「その好意をなぜここまで責められるのか、忸怩たる思いであります。敵を間違えていないでしょうか」などと恨み言めいたものが綴られていたのには、笑止どころか絶句であった。

メールは、「いずれにしても、これ以上の対応はできかねますので、ご理解いただけますよう、よろしくお願い申し上げます」と、例によって型通りの挨拶が記されて終わる。私はすぐさま返信を書いて送り、それが現時点で、この編集者との間のやり取りとしては最後のものになっている。「引用としてペースト」を用いながら、相手の記した一文一文に対してそれなりに容赦のないコメントを付けていった返信の具体的な内容については、ここには記さないでおく。

で、2月20日発売と告知されながら都内のレコード店などにはいつもと同じく数日前に配本された『ミュージック・マガジン』3月号だが、そのフィードバック欄に加藤が送った4度目の投書『「トホホ」の真意を問う』は、またしても掲載されず、一方、編集部からの「お詫びと訂正」として掲載されたのが以下の文章であった。

●12月号の太陽肛門スパパーンの記事で102ページに掲載した写真は、彼らが2017年のフジロックに出演した際のもので、インタビューを受けている花咲政之輔氏は写っていません。バンド全体の雰囲気分かるものをと考えて掲載しましたが、説明不足でした。また、アルバム『太陽肛門スパパーンと人間』には、彼らの楽曲が使用されている楫野裕監督による映画『世界に一つだけの花』のDVDが同梱されていますが、本文中では触れられていなかったため、編集部として注釈を入れるべきでした。読者の皆さんに不親切な記事になっていたことをお詫びします。

これがつまり、12月号のスパパーンの記事には不備が疑われる点があると私が指摘をしたことに応じて、掲載写真に「キャプションを入れなかった点、またDVDが付属されていることに対する言及がなかった件は、確かに読者に対して不親切」だったので、「遅ればせながら3月号のフィードバック欄に、編集部として読者にお詫びし、追加情報として説明」をしたというものにあたるらしい。が、これらの説明なるものは、間違っているとは言わないまでも、適切と言えるものではない。

まず、フジロック・フェス出演時の写真に花咲が写っていないことを記事中に記さなかったのは「説明不足」であったとして、それは写真に花咲が写っていないことに気づかなかったからなのか、それとも、気づいてはいたが説明するほどのことではないと考えたからなのか——と、あり得る可能性というものを挙げていけば、これは前者、つまり編集部（というよりさしあたっては記事担当編集者）は写真に花咲が写っていないことに気づかなかったと見なすことのほうが自然だろう。そして、その場合、記事担当編集者が「説明不足」よりも前に反省すべきは確認不足であり、さらには認識不足であるということになるだろう。

この確認不足と認識不足が（さしあたって『太陽肛門スパパーンと人間』を持っている者から見ればといった条件付きにはなるが）さらに露呈するのは、後半の記述である。「アルバム『太陽肛門スパパーンと人間』には、彼らの楽曲が使用されている楫野裕監督による映画『世界に一つだけの花』の DVD が同梱されてい」とのことだが（ここで「楫野」は「かじの」と読むことを付言しておく。だからもちろん上記引用文ではルビがふられるべきであったと思う）、音楽サイトの「ナタリー」での紹介記事にもあるように、『太陽肛門スパパーンと人間』は CD と DVD の 2 枚組であり、その DVD に収録された映画『世界に一つだけの花』は「彼らの楽曲が使用されている」というだけでなく、キャストとスタッフを務めるのはいずれもスパパーンのメンバー並びに関係者であること、そして企画の立案者としてプロデュースの任にあたったのは花咲政之輔その人であることが、アルバムのブックレットには（それこそ、当然のことながら）明記されているのである。

したがって、『ミュージック・マガジン』3月号フィードバック欄「お詫びと訂正」の後半の記述からうかがえることは、太陽肛門スパパーンの記事担当編集者が、そこであらためて言及しなければならぬ対象について、精査はおろか通覧することさえしなかったのではないかという疑いである、とすることができるだろう。だが、それはせいぜい「トホホ」な事態という程度のものに過ぎない。それよりも問題なのは、12月号のスパパーンの記事が「読者の皆さんに不親切な記事になっていたことをお詫び」することをもって、記事の担当編集者は加藤と花咲に対して「これ以上の対応はできかねます」としていわゆる幕引きを図り、11月号アルバム・レビューの小山守氏による『太陽肛門スパパーンと人間』についての評文の中の、「歌は下ネタ混じりでトホホな感じ」という記述をめぐる議論については、これを無かったことにして済ませながら何ら恥じ入るところがないという事実だろう。

このような経緯があったことを踏まえたうえで私は、創刊 49 周年（と銘打たれることは結局なかったが）を迎えることとなる『ミュージック・マガジン』2018年4月号のフィ

ードバック欄への掲載を希望して、以下の投書を送信した。

■本誌編集部の変節を問う

3月号の当欄に17年12月号の太陽肛門スパパーンの記事が「読者の皆さんに不親切な記事になっていたこととお詫び」する旨の一文が掲載された。特にバンドに関する知識を持つ者でなくとも気づくであろう、その「不親切な記事になっていたこと」が、3カ月を待ってから報告されたことを訝しく思う読者がどれだけいたかは分からないけれども、そうした「お詫び」が掲載されるのに3カ月を待つことになった経緯を知っており、よってそれは読者にも知らされて然るべきであると考え人間が、この文章を書いているということはまず表明しておこう。

事の経緯はこうである。アルバム『太陽肛門スパパーンと人間』に解説文を寄せた者でもある私は、11月号アルバム・レビュー／ロック・日本における同作の評文に「歌は下ネタ混じりでトホホな感じ」という記述のあったことを問題と考え、『トホホ』の真意を問う」と題した投書を12月号に対して行ったが、これは掲載されなかった。その際、バンドの中心人物である花咲政之輔から、投書が掲載されなかったのは12月号のスパパーンの記事が先の評文に対する批評になっているからとの編集部の言い分が記されたメールを転送されたのだが、そうした理由がまったくの強弁であることは、読者にあっても二つの記事を読み比べることによって了解されうらと思う。とにかく、投書掲載の裁量権を編集部が持つことは認めるとしても、不掲載の理由には相当な無理があるので、そのことを問い質すべく私は編集部に対してやや長め（約1万8千字）の覚書をメールで送り、12月号の記事に不備があることもそこには書き添えた。要するに3月号の「お詫び」に書かれていることはすべて私が指摘をしたものだったのである。

さて、私がメールを送ったのは11月下旬だったが、編集部からは即日、すぐに長文を読める余裕がないため少し時間がほしいとの返信があった。ところが、それから1週間2週間、そしてひと月が経ち、さらに新年を迎えても一向に返信がない。一方で私は当欄に対して同名同内容の投書を送り続けたが、1月号2月号ともに掲載されなかった。そして先のメール送信後8週間が経った時点で催促をすると、スパパーンの記事の担当編集者から、ようやく返答が送られてきたのだが、その内容はというと、まずはレビューの文章が加藤から見れば理解が浅いものだとしても、レビューアは「正直に聴いた印象をもとに評価を下している」のだから、これを編集部としては否定できず、よって加藤の投書は掲載しないことにした、という先に花咲に述べたものとは異なる理由を挙げてその対応を正当化した上に、元本誌編集部員の加藤がプロモーションに来たというので、本来の基準では「広告出稿でもない限り基本的に取り上げ」ないようなバンドとそのアルバムについての記事を設けたというのに、「その好意をなぜここまで責められるのか」といった文言までもが記されたものだったのである。

恨み言めいた最後の一言には苦笑したが、それはどうでもいい。インタビュー記事が広告出稿とバスターである事情を臆面もなく晒したのも、貧すれば鈍すとも言うておけば足りる。問題は『太陽肛門スパパーンと人間』の評文が不問に付されたことだ。いまから31年半前の86年11月号本誌に「NIPPON NO ROCK BAND への批判と反論」という特集記事が掲載された。それは桑田佳祐を擁するKUWATA BANDのCDを当時の編集部員だった藤田正が批判的に評したことに端を発する議論からなるものだったが、この特集を藤田とともに担当したのが入社1年目の加藤だった。私は別にそのことを“自慢”したいわけではない。ただ、私がそこに在籍していた頃とは無残なまでに変わり果てた編集部が、いま、ここにあるということだけは言えると思う。私はこの文章を、創刊49周年にあたる号への掲載を求めて投書しているが、果たして本誌はこれから創刊50周年へ向けて何らかのキャンペーンを展開するだろう。そしてそこでは50年という時間の、その連続性が自讃されるはずだが、これが現下の安倍政権がそうであるように、何らかの虚偽と隠蔽の下においてなされるのであろうことは、読者としてスパパーンのアルバム評とインタビュー記事とを担当した本誌編集部員に対して言うておこうと私は思う。

投書の末尾には署名が入り、それと見出しを含めての分量は15字×120行。投書に関する注意事項を記した箇所や「お詫びと訂正」などに充てられる箇所を含めた同欄の全行数にこれは等しく、つまり明らかに分量オーバーなものであるわけだが、だからといって最初から掲載することが出来ないと分かっているものを送りつけたというのではない。何年か前までこのフィードバック欄には見開き2ページが取られていたことからすれば、送られてきた投書の本数やその内容、分量などに応じて、同欄をふたたび2ページに戻す場合があってもよいはずであり、あるいは少々みっともなく見えるかもしれないが、文字の大きさや字間、行間を変更するといったやり方があってもよいだろうと考えるからだ。さらにいうなら、そもそも投書の注意事項にページ全体の2割強のスペースを割いている現在の体裁が、編集部の読者に対する傲慢さを示して余りあるのであって——といった少しばかり挑発的な文言を送信メールの文面に記しておいたのが良くなかったのかどうかは分からないが（まあ、良くなかっただろう）、結果としてこの投書が4月号のフィードバック欄に掲載されることはなく、また、「これ以上の対応はできかねます」という言葉どおり、スパパーンの記事担当編集者からはいかなる反応も返ってくることはなかった。

以上が『ミュージック・マガジン』フィードバック欄に掲載されなかった2通の投書めぐり、さしあたって2018年4月現在までの顛末である。私は、こうした出来事があったことをまず私自身が忘れないでおくためにこの覚書を記すことにした。そしてまた私は、こうした出来事のあったことが私と花咲政之輔と太陽肛門スパパーンの記事担当編集者と

いった人間以外の誰にも知られないことによって、それらが無かったことにされてしまうとすれば、これを許すことは出来ないと考え、花咲政之輔の協力を得て、このように太陽肛門スパパーンのウェブサイト上で覚書の公開を行うことにした次第である。

もつとも、公開ということでは、昨年 12 月タワーレコード池袋店で配布されたフライヤーに投書『『トホホ』の真意を問う』は掲載されており、その場に居合わせた何十人かの人間の目には触れているはずなのだった。そして、このうちの誰かがフライヤーをネットに上げるなどすれば、『ミュージック・マガジン』フィードバック欄に掲載されなかったその投書は、掲載されなかった事実とともに、さらに多くの人間の目に触れることになったかもしれない。が、現在のところ、「太陽肛門スパパーンはミュージック・マガジンを勝手に販促します」と題した同誌への「応援」文——というのは、件の編集者が加藤のメールを読むだけの時間的な余裕がないことの原因として「人手不足」ということを挙げていたので、創刊してもうすぐ半世紀を迎えようとしている老舗音楽雑誌の編集部の、その内実は、安倍独裁政権による新自由主義的似而非経済政策の下でますます悪化が進む労働現場の一事例に他ならず、すなわち同誌の記事中における問題点や瑕疵の疑われる箇所とは、そうした編集部の有り様を影絵のように映し出したものと考えられ、ならば同誌が一冊でも多く売れることによって得られる収益の向上は、編集部の人手不足の解消と労働環境の改善へとつながり、ひいてはそれが記事中の問題点を発見して解決するために必要な精神的余裕を編集部にもたらすことになるから、ぜひともみなさんに『ミュージック・マガジン』を講読してもらいたい、といったことを記したものであった——に『『トホホ』の真意を問う』を抱き合わせたそのフライヤーがネットに上がっているということも、そのような内容のフライヤーが配布されたことについて 2 ちゃんねるなどに書き込みがなされたということも確認は出来ていない。

これは太陽肛門スパパーンの知名度がいまだそれほど高いわけではないということが反映された結果であるのかもしれない、またはスパパーンに関心を持つ人たちはそのようなやり方で露出の度合を上げることについて、それほど積極的ではないということの表れであるのかもしれない。あるいは同誌に対する挑発的な言説では菊地成孔が自身のブログに記した「ミュージックマガジンから撤退します」(2012 年) など、その徹底性において際立ったものが存在していることから、最早ネット上では関心を引くような話題になり得ないという認識が行き渡っているのかもしれない。しかし、そうであるならなおのこと、『ミュージック・マガジン』編集部が同誌のフィードバック欄に、加藤による投書「本誌編集部の変節を問う」を掲載しないという判断を下したことはともかく、同じく加藤による先行の投書『『トホホ』の真意を問う』を掲載しなかったことは、疑問の残る対応として映るだろうと思う。スパパーンの記事担当編集者によれば、「加藤さんにとっては理解が浅いと思

われるのは当然」であるという『太陽肛門スパパーンと人間』の評文を書いた小山守氏は、「正直に聴いた印象をもとに評価を下しているのもであって、それは編集部としては否定できない「ため、編集部で話し合い、掲載可否を判断する編集部の権限で、加藤さんの投稿は掲載しないことに決ま」ったのだというが、私が『トホホ』の真意を問う」の中で小山氏の評文について、これを「理解が浅い」と言っているわけでもなければ、ましてや「否定」などしていないことは明らかだからである。

私が投書に記したのは、小山氏が『太陽肛門スパパーンと人間』の評文の中で「歌は下ネタ混じりでトホホな感じ」と記し、それを減点の理由としていることについて、CD と DVD の 2 枚組であるあのアルバムの一体どの「歌」を「下ネタ混じり」なものと解釈し、そして「トホホな感じ」という印象を抱いたのかが分からず、というのも文中には個別具体的な曲名が（もしくは何曲目といったことさえ）記されていないからだが、小山氏があのアルバムに収められた「歌」から全体的に「下ネタ混じりでトホホな感じ」という印象を抱いたのであれば、それは私からすれば想像力の貧しさしか認められないものであるものの、しかしあの文章からはそうした解釈や印象、さらには評価が下される過程について、ほとんど何も読み取ることができないので、小山氏にはあらためて説明を求めたく、ただし『ミュージック・マガジン』誌上ではスペースが限られているだろうから、ウェブサイトにコーナーを特設するといったやり方も考慮に入れて検討してもらいたい——といったことである。

繰り返すが、私は『トホホ』の真意を問う」の中で小山氏の評文について、これを「否定」してはいない。とあって肯定しているわけでもなく、私が小山氏の評文に対して行っているのは、そこから問題を見出すことであり、さらには議論へとつなげていくことだ。『ミュージック・マガジン』編集部に対しても、私が求めているのはあくまで議論である（花咲政之輔ならばこれを、より過激に、したがってより根源的に討議と名指すだろう）。しかし、ここまで見てきた通り、彼らはそれを忌避しており、そのような議論の前提となる問題の存在を無かったことにした。この一点において彼らは、現下の安倍独裁政権とまったく同質の虚言と隠蔽を行っていると言わねばならない。たとえ、件の編集者が同誌に「[Points Of View 拡大版] 共謀罪は表現者を萎縮させる。中野晃一・上智大学教授に聞く」（2017年8月号掲載）というような記事を書いた人間であるとしても。

以下は補足である。太陽肛門スパパーンの記事担当編集者は花咲政之輔へ宛てたメールに「加藤さんの投稿については、結論から言うと今回は掲載いたしませんでした。志田さんによる今回のインタビュー記事が、小山さんのレビューに対する批評になっていると判

断いたしました」と書いていた。一方、私は投書「本誌編集部の変質を問う」に、「そうした理由がまったくの強弁であることは、読者にあっても二つの記事を読み比べることによって了解されうらと思う」と書いたのだが、念のためこれに説明を加えておきたい。志田歩氏による花咲へのインタビューを中心としたスパパーンの記事は、小山守氏による『太陽肛門スパパーンと人間』の評文では一言も触れられていなかった、花咲とバンドの政治性、さらにその政治性と音楽との関わりといったことについての言及がなされたもので、また小山氏の評文よりもずっと分量の多いものであるから、花咲とバンドの有り様をより詳しく伝える内容になっているのは確かである。だが、だからといってそのことは、志田氏による記事が小山氏による評文の批評となっていることを意味するものでもなければ保証するものでもない。

私が小山氏による評文の中から、看過することの出来ない記述として取り出したのは「歌は下ネタ混じりでトホホな感じ」という一節だった。そして、志田氏による記事の中には、この一節を念頭に置きながら記したと思われる以下の一文がある——「下ネタをちりばめつつ政治的なメッセージを込めた歌詞」。とするとスパパーンの記事担当編集者は、この一文の存在が「志田さんによる今回のインタビュー記事が、小山さんのレビューに対する批評になっていると判断」したことの根拠になりうると考えたのかもしれない。しかし、志田氏がそこで（小山氏と同じように）「下ネタ」という言い方をしている以上、彼はスパパーンの歌にあらわれる性的な言葉の意味するものを捉えることが出来ているのかまったく疑わしいと言わなければならない。そのことは、例えば阿部嘉昭・現北海道大学准教授による 2005 年の論考「境界が溶けてゆく——太陽肛門スパパーン『馬と人間』について」の中にある以下の文章に目を通すことによっても了解されうるだろう。

花咲の歌詞がすごくどぎつい。まんこ、ちんぼなど放送禁止用語満載で、一聴するとお下品極まりない。ところがやがて判明するように、ここには実はつよい文明批判がある。歌詞のどぎつさと演奏の高度さの離反——それによって彼らは聴衆の笑い、あるいは居心地の悪さを積極的に醸成しようとしている。この感覚はジャズメンが歌詞音楽をやるときの冗談ばい感じとも通じる（たとえば山下洋輔と一緒にやっていたときの坂田明など）。

その花咲の歌詞が実は政治的なものだった。だから歌詞のレベルでもやはり猥褻さと先鋭的な政治性を同時共存させたザッパとの共通点がみてとれる。

おそらく、いや、まず間違いなく、志田氏による記事のタイトルを考えたのはそれを担当した編集者だろうが、私がこの覚書の冒頭で引いた、単なる説明に過ぎない失格レベル

のそのタイトルには「白いブリーフ姿でパフォーマンスする」という文言がある。だが、記事の中で、どうしてスパパーンは「白いブリーフ姿でパフォーマンスする」のかについての志田氏による言及はなく、そもそもそれは花咲に問いかけられてさえいないのだ。当然ながら、「歌詞のどぎつさと演奏の高度さの離反——それによって彼らは聴衆の笑い、あるいは居心地の悪さを積極的に醸成しようとしている」「その花咲の歌詞が実は政治的なものだった。だから歌詞のレビューでもやはり猥褻さと先鋭的な政治性を同時共存させたザッパとの共通点がみてとれる」というような、性的なものと政治的なものをめぐる弁証法的な思考のうかがえる記述を、志田氏による記事の中から見つけることは出来ない。その点において——25 年来の付き合いがある相手に対して酷な言い方にはなるが——志田氏によるスパパーンの歌と音楽へのアプローチは、小山氏によるそれと五十歩百歩であり、したがって「志田さんによる今回のインタビュー記事が、小山さんのレビューに対する批評になっている」かどうかは疑わしいと私は考えるのである。

以下は蛇足である。太陽肛門スパパーンの記事が掲載された『ミュージック・マガジン』17年12月号のアルバム・レビューのコーナーには、小山守氏が書いた以下の評文がある。バンドの名前とアルバムのタイトル、レーベルなども併せて引用する。

三文役者『魂』 フライングパブリッシャーズ SMYCD001

頭脳警察のメンバーだった石井正夫らが 77 年に結成したバンドで、約 22 年ぶりの新録作。重量感たっぷりなハード・ロックを聴かせ、ヴォーカルも演奏も骨太で懐が深い。ただ 70 年代で時間が止まっている感は否めず。 ⑥

さて、三文役者という（けっして有名というわけではないのだろうと私も思う）バンドの名前を、というか三文役者というバンドのことを、多少なりとも知っている人間であれば、このバンドの中心人物がヴォーカルと作詞作曲を担当する花之木哲であるということは、誤解しようのない事実として認識しているはずだろう。そして、花之木哲が、頭脳警察解散後のパンタの最初のソロ・アルバムに収録された「三文役者」という曲の作詞者であるということも、それなりに知られた事実のはずである（この『魂』というアルバムの 1 曲目がその「三文役者」なのだが、ここでは花之木哲とパンタの共作としてクレジットされている）。しかし、頭脳警察のメンバーだった石井正夫が三文役者結成時のメンバーだったこともまた事実であるから（とはいえ、実を言うと私はそのことをバンドのオフィシャル・サイトで確認するまで知らなかった）、小山氏による評文の冒頭の記述は、間違っているわけではないのだが、ただ、どうしてそこに花之木哲の名前が記されていないのかということは、三文役者というバンドのことを多少なりとも知っている人間であれば、誰も

が訝しく感じることだろうと思う。

したがって、三文役者というバンドのことを紹介するのに、なぜ小山氏は花之木哲の名前を記さず、「頭脳警察のメンバーだった石井正夫らが 77 年に結成したバンド」と記述したのかという疑問が、ここで当然のように浮かんでくるわけだが、それは三文役者のオフィシャル・サイトを見ることによってただちに氷解した———というか、まあ、おそらく、以下のようなことであるのだろうと推察することができた。サイトの「ヒストリー」というページに載っている年表の最初の一行には、こう記されている。

1977/4 元頭脳警察 Bass 石井正夫他とともに”三文役者”結成

この三文役者のオフィシャル・サイトは、トップ・ページにメンバーのステージ上の写真を掲げていて、中央には花之木哲のそれが最も大きく配置されているのだが、そこに写っているのが花之木哲であることの説明というかキャプションの類いは添えられていない。サイトを訪れるのは基本的にはバンドのファンであるし、何か説明的なキャプションなどくっつけるのはかえってみともない、などと他の誰でもない花之木哲が考えたのかどうかは分からない。ところが、アルバムの資料を渡されて、おそらく初めてそのサイトを訪れたのであろう小山氏は、そこから、このバンドの中心人物がトップ・ページの中央に配置された写真に写るヴォーカリストで、名前は花之木哲であるということ、ひとつの知識というか情報として取得しこれを咀嚼する（などというほどのことでもないのだが）ことが出来ず、ただ、バンドの年表の冒頭には「元頭脳警察 Bass 石井正夫」が結成時のメンバーだったということが記載されていて、そこにある「とともに」という言葉の意味するものが何なのかは不明だけれども、とにかく「頭脳警察のメンバーだった石井正夫らが 77 年に結成したバンド」と書いておけば、それはそれで間違いではないと考えて、そのように書いたということなのだろう、と私は推察する。

以上から、小山氏が三文役者というバンドに関する知識および認識———と呼べるものを持っていないことは明らかになったと思われ、だから、小山氏は三文役者というバンドのことをほとんどまったく知らないまま、作品のレビューを引き受けたと推察されるということ念頭に置きながら、氏が書いた三文役者のアルバム『魂』の評文をあらためて見ていこう。

まず同作の評点は⑥である。これは⑩を満点とすると、その 3 分の 2 に満たないことから及第点をやや下回るものと解釈することが出来よう。そこで評文を見ると減点の理由を示す批判的な記述は、「ただ 70 年代で時間が止まっている感は否めず」という箇所である

ことが分かる。そして、看過出来ない記述とは——と、ここで私は看過出来ない記述があるということをもっと言っただけではなかったが、三文役者というバンドのことを多少なりとも知っている人間（さしあたって私のことだ）からするならば、一体、小山氏はこのバンドのことをほとんどまったく知らないにもかかわらず、彼らが活動を始めた「70年代で時間が止まっている感は否めず」などと評することがどうして出来るのか、ということはそれこそ素朴な疑問としてただちに生じてくるだろう。

とはいえ、小山氏が、このアルバムに収められた楽曲とその演唱を端的に古めかしいものと感じ、それを「70年代で時間が止まっている感は否めず」という言い方で表したということであれば、それはそれでひとつの解釈として認めてよいと思う。また、小山氏はここでも抜かりなく、「重量感たっぷりのハード・ロックを聴かせ、ヴォーカルも演奏も骨太で懐が深い」というように、評価すべき点は評価しているのである。しかし、逆にそこまで評価するのであれば、「70年代で時間が止まっている感は否め」ないので10点満点から4点が減点されて6点になるということは、古めかしいと感じられることが小山氏にはマイナス評価の相当に強い根拠として意識されていることになるはずである。

そこで、古めかしいと感じられることが、マイナス評価の相当に強い根拠として意識されるというのはどういうことなのかを考えてみよう。もちろん、古めかしいという言い方からしてすでに負のニュアンスがあるわけだが、一方では古めかしいと感じる意識の働きを通じて、現在を相対化する視点に立つという可能性も得られるはずであり、しかし、そうしたものを得ることが出来なければ、ただひたすら現在において価値のあるものだけが絶対化されていくことになるはずである。そして、ロックというかポピュラー音楽の場において、古めかしい、今の時代には合っていないということがマイナス評価となるのは、まさしくそれが多くの聞き手を得られないこと、すなわち売れないことを意味するときである——ということは少なくとも『ミュージック・マガジン』を読むような人間たちの間では了解されることと思う。

したがって、小山氏は『ミュージック・マガジン』のアルバム・レビューのコーナーで、三文役者の『魂』という作品を俎上に載せ、それは「重量感たっぷりのハード・ロックを聴かせ、ヴォーカルも演奏も骨太で懐が深い」ものであるが、「ただ70年代で時間が止まっている感は否め」ないがゆえに、あまり売れるとは思えないとの理由により、10点満点から4点を減点して6点という点数を、フライングパブリッシャーズというインディー・レーベルからリリースされた（がゆえに他でもない彼ら自身が売れることにそれほど執着しているわけでもないであろう）そのアルバムに対してつけた——というふうにも言えるわけだが、果たしてこれは穿った見方になるだろうか。

すでに蛇足から蛇足々とでもいう言葉の分量になっているが、もう少しだけ続けたい。小山氏はもちろんのこと、アルバム・レビューの担当編集者、太陽肛門スパパーンの記事担当編集者、また形だけでも雑誌内の全文に目を通してはいるはずの同誌編集長、さらにはいま現在ミュージック・マガジンという会社に在籍している社員の、誰一人として知らないだろう（もしくは憶えていないだろう）と思うが、かつて三文役者は『ニューミュージック・マガジン』のコンサート評で取り上げられたことがある。偶然、と言ってもいいだろう、ちょうど40年前の78年4月号に掲載されたもので、評者は山名昇。おそらくこうした機会が訪れることは二度と無いと思われるので、引用のルールに則って、以下にその一部を書き出してみよう。

このバンドに意味があるのは、決して上手とは言えない連中の腕にではなく、メロウな風潮に対する毒を持っているからなのだ。「ちょっとオマンコやらせろよ」と歌った後に「北斗星に向って銃を撃て」なんて、よっぽどまじめでロマンチックじゃなきゃ、ステージで吐ける言葉じゃないだろう、今時。彼等のライブは、恋人と一緒になめらかな音楽を気持ち良く聞きに行くのと真反対の場所だ。熱エネルギーの発散にかけては、レコードを出しているバンドもなかなか太刀打ち出来ないんじゃないだろうか。

私はこのコンサート評が載っていたことを憶えていて、今回それを久々に読み返したことになるが、そこで私が思ったのは、この40年前の三文役者は、その表現の振幅の有り様において太陽肛門スパパーンと相通ずるところがある、というか時間的順序に即していえばスパパーンに遙か先行してそのような振幅を持っていたようだという事だった。そして、三文役者の『魂』という（これも蛇足を承知で書く。自分で買った）アルバムを聴いて私が思ったのは、彼らの音楽はその表現の振幅の有り様において、40年前と比べてかえって狭まっているのではないかということであり、だから小山守氏が「70年代で時間が止まっている感は否めず」という感想を抱いたのとは異なって、むしろもっと徹底して40年前の彼らに回帰していくべきではなかったかということであった。

だが、一方で私は、三文役者の『魂』というアルバムには、小山氏が「70年代で時間が止まっている感は否めず」という感想を抱いたのとは異なって、そこに紛れもなく現下の安倍独裁政権と非妥協的に対決するメッセージが歌い込まれているのを、確かめることができた。具体的に言えば、3曲目「Hold On My Way」の2分1秒から6秒の間に、そのメッセージは——山名昇の文体を借りて言ってみよう——吐き出される。これは太陽肛門スパパーンの音楽を好む人たちにも、ぜひ聴いてもらいたい曲だと思う。

だからというわけではないが、いや、だからということになるのか、一体、小山氏は三文役者の『魂』というアルバムから、何を聴いたのだろうか。まあ、それはともかくとして、せめても小山氏は17年12月号「アルバム・レビュー」の三文役者『魂』の評文の中で「頭脳警察のメンバーだった石井正夫らが77年に結成したバンド」と記したことについて、それが適切なものではなかったことを、もう半年近くが経過してしまったけれども、フィードバック欄の「お詫びと訂正」において報告すべきである、ということは言うておこうと思う（これが実行に移されたなら、同誌の隠蔽体質にも若干の改善が見られたと言っただけでもいいかもしれない）。そして、『ミュージック・マガジン』がその名のと通りの音楽雑誌であることを、なお看板として掲げるのであれば、編集部員は「共謀罪は表現者を萎縮させる」といった記事を書くよりも前に、執筆者から送られてきた音楽に関する原稿を精読してそのブラッシュ・アップを図るとともに、簡潔で訴求力のある記事タイトルを付けることに、まずは注力すべきだろう。そうしなければ、いや、そうしたとしても、あのような記事はリベラルな編集者として見られたいという名誉欲を満足させるためだけに書かれたものなのではないかということを見透かされるからだ（少なくとも私はそのように思ったということである。これが最後の蛇足の一言だ）。